

おどろきモモの木クリニック・パートVII



宮本秀明●神奈川県立がんセンター皮膚科部長

その1. 某日、某学会にて

受付で参加費を払ったら、首からぶら下げる名札をくれた。囚人みたいだね、こりゃ。「懇親会で食べ物を皿に盛る時ぶらぶらして邪魔になるよ」なんて考えてると時間がない。学会展示発表のポスター張りに早く行かなければ……と、息せき切って展示会場に到着したらガビヨン、画鋏が置いてない。セロハンテープも「自分で用意して下さい」とそういえばプログラムに書いてある。涙が出るほど便利なバッグや誰にでも似合うアクセサリは頼まなくても呉れるのに、ポスター貼る小道具は自前で用意せねばならぬとは、とほほのほ……。

その2. ランチョンセミナーは何故眠い

10年位前から少し大きな学会ではランチョンセミナーを設けるのが流行りだした。それ以前は昼食を理由に会場外に行ったきり戻らない御仁が小生も含めて多数いたが、ランチョンセミナーに出るとそれに続く講演も2つ3つ聞くことになるのでマジな人にとっては効率的ではある。

しかしランチョンセミナーにも欠点がある。話が佳境に入る頃に眠くなることである。眠気覚ましに好きでもないコーヒーを飲んだりハッカ入りガムを噛んだりしたが効果は今一であった。そこではたと気がついた。「弁当を食べなければいいのだ」と。全く食べないのでなく、講演前や講演開始直後（この時は余り空腹感はない）ではなく、講演終了予定15~20分前頃に食べ始めるのである。えっ、この時間帯に食べる人は極少数なので目立つんじゃないかって？ いや心配御無用、会場は薄暗いし、その頃は周りには満腹で高斟いびきのお方も結構いるかも知れないのだから。

その3. 親を尊敬する瞬間

子供も小学校位になると、お絵描きや作文で表彰状をもらうことがあり、幾つかは額に入れて家の壁に飾ってある。

ある時、自分の医師免許証を子供たちに見せたところ最後の行まで読んで「お父さんって偉いんだね」と2人とも感心したように言った。子供達は厚生大臣の署名欄に見知った名を見つけたのだ。当時の某総理が10数年前厚生大臣だったころの免状を見たのである。子供たちは私の医師免許証を総理大臣からの表彰状と思ったようである。

その4. 将来何になりたいの？

子供によく投げかけられる質問である。年齢によって答えは様々であり、年齢が上がるに連れて現実的になり夢の部分が減ってくる。現実と夢のバランスと言う意味では小学校卒業時も面白い。

わが子の小学校卒業文集を覗いてみた。クラスメイトの様々な「将来の夢」が語られていたが、時代の流れのためか我々の頃とは随分違っていた。

Nちゃんの欄に「バックダンサー」と書いてあるのを見て、SAM や大澄賢也の影響だろうが時代も変わったもんだと驚いた。

その昔私の母はまだ幼かった弟が勉強をむずかると「勉強しないとね、大人になっても『歌手の後ろで踊る人』か『××』にしかなれないのよ」と諭していたからだ。「歌手の後ろで踊る人」とは今で言うところのバックダンサーのことだが、当時はこの言葉は流布していなかった。私の父はブラウン管に映る、歌手の後ろで踊ってる男性群を一瞥して「土方をやった方がずっと立派だ」とか「徴兵制があった頃はこんな軟弱な奴等はいなかった」とか吐き捨てるように言っていたものだ。

米国との戦争に負けたことが余程悔しかったらしい。

その5. 続・将来何になりたいの？

小生の小学校卒業の頃は「新幹線の運転士」と書いた人も複数いた。東海道新幹線の出来る2年前であり、周囲に国鉄職員の子弟も少なくなかったのである。

そういえば昔の国鉄職員は威張っていたねー。「乗せてやる」という態度だった。国鉄からJRに変わった途端、駅の改札で「おはようございます」と見知らぬ駅員から声を掛けられて面喰らった人も少なくなかろう。ちょっと前まで胸をそらせて切符に鍊を入れてた人間が、作り笑いしながらオレンジカードやイオカードを売っているのを見ると不気味であった。ソビエト連邦が崩壊した理由も、中華人民共和国が健在な理由も何となく判るような気がする。

その6. 間違いだらけの女子校選び

中学受験の準備は受験の3年前からの塾通いから始まる。塾というものは実に有り難く「あなたのお子さんはせいぜいこの程度ですよ」と悟らせてくれる。学校を選ぶポイントは2つあり、それは学力と校風である……なんて考えているうちに、光陰矢の如し、すぐ本番がくる。

進学校がだめならせめてセーラー服のお嬢様風学校へと願ったが、「そうは烏賊（いか）の××」（故永井隆吉名誉教授ならこうおっしゃるだろう）、超ミニ・茶髪・ピアス・ケイタイがオンパレードの、校則ゼロに等しい学校に入学することになった。しかし制服を着せてみるとわが子ながら意外とサマになるものである。入学すれば早速部活（昔はクラブ活動と言ったものだが）選びである。テニス部かバドミントン部あたりだろうとたかを括っていたら「空手部にしようか」などと言いだしたので泡を喰った。しかし数日後「チアリーディング部にしたよ」と嬉しそうに言うので「チアガールって、脚上げてパンツ見せるやつかい？」と心配すると「大丈夫、ブルマはくから」と涼しい顔である。う〜ん、ブルマもそれなりに危険なんだが……。

その7. 日本を良くする選挙制度

そもそも「清き1票」などというものが間違いの素であり、それよりは「清き5票」とか「清き10票」

の方がモアベター（小森のおばちゃま元気かな？）なのである。

南総里見八犬伝の主人公達ではあるまいし、100%善や100%悪の人間は存在しない。それと同じで心から100%A党支持、100%B党支持の人はまず居まい。1票しかないので苦汁の選択を迫られ、その時のムードに流されて投票されるので政権は不安定となり、大衆の顔色ばかり窺う政治家しか生き残れなくなるのである。例えば有権者各々に5票与えられれば「今回は3票はA党、1票はB党、1票はC党、D党にはいつでも絶対投票しない」…という具合になって民意は反映され易くなる。勿論5票全てA党（あるいはA候補者）に入れるも自由である。なに、集計に手間が掛かるって？ イット革命の某元総理ではないが、ITを使えば集計なんて造作もないではないの。某援助交際裁判官や某手錠教諭ではあるまいし、出会い系サイトに凝るだけがITではない。

その8. タイトルの由来

その昔ロマンポルノ華やかなりし頃「伊豆の踊り子」という映画が日活で作られた。内容は川端康成原作とは全く関係なく、イヤらしい踊りをする伊豆地方のドサ廻りダンサーのお話だったので当然のことながら川端康成の遺族は怒り「ノーベル賞作家のタイトルを勝手に使い、卑猥な映画を作るとは！」と裁判沙汰になった。しかし裁判の結果はあにはからんや日活側に軍配が上がった。何故か？ 川端作品は「伊豆の踊り子」だったので「踊」と「子」の間に「り」を入れたために日活作品は全く別な作品と見なされてセーフとなったのだ。そういえばJR東日本の伊豆方面行き特急「踊り子」も確かに「り」が入っている。この裁判は何とか乗り切ったものの日活はその後も収益が上がらず、女優陣に一肌脱いでもらっても（脱ぎすぎて当局のお叱りを受けることは度々であったが）焼け石に水でとうとう倒産してしまった。

さてこの随筆シリーズもどういう訳か7回目を数えるようになった。始めた頃は三宅裕司と麻木久仁子の司会で「驚き桃の木20世紀」という番組が某テレビ局で放映されていた。この随筆のタイトル「おどろきモモの木クリニック」もわざと部分的に平仮名にしたり片仮名にしたりしてテレビ番組のタイト

ルとカブらないように心掛けた。尤も「驚き桃の木
山椒の木」とかそれをもじった「狸にブリキに洗濯
機」などは昔から広く人口に膾炙^{かいしや}されているので文
句をつけられることはまず無いと思ったが日活の事

象もあり、用心したのだ。しかし前出のテレビ番組
自体が何年か前に終了して人々の脳裏から消えつつ
ある今、杞憂に終わったようである。

葦 順

*

中嶋 弘●横浜市アレルギーセンター所長

不肖、私は、これといった能もなく、これといっ
た趣味もなく、平々凡々の人生を過ごしてきました
が、平成5年にパシフィコ横浜で第37回日本医真菌
学会総会を開催したのを契機にキノコグッズのコレ
クションを始めました。がらくたばかりですが、私
にとっては宝ものばかりで、気が付くと一部屋を占
めるほどになっていました。

キノコと言うと何となく暗いイメージが付きま
といますので、あまり口にしませんでしたが、先日、
キノコの本場、中国の雲南省昆明市で開催された第
5回日中真菌国際会議（APSMと共催）に出席し
たところ、キノコ（グッズ）のコレクターが日本に
も結構いることが分かり、急に心強くなりました。
そこでコレクションの部屋をMUSHROOMと命名
し、皆様にも見てもらえるように整備しました。ど
うせ見ていただければキノコミュージアム位にし
てからとも思いましたが、先立つものにも限度があ
り、寿命にも限度がありますので、MUSHROOM
のまま近辺の方に公開を始めました。キノコのよ
うなグロテスクなものに興味をもたれる方は先ずは

あるまいと高を括っていたのですが、これがお世辞
半分としても意外や好評で、少し自信がつけました。
なお、小生の寿命は、厚生（労働）省の簡易生命表
によるとあと10年で日本男子の平均寿命に達するこ
とになっています。

これまでは、カビを目の敵にして退治するのが私
の商売でしたが、無位（無胃）無冠の身となり無為
に過ごしていると、カビやキノコのような生物にも
生命があり、姓名もあることを知り、最近では愛お
しさを感じずようになり、自身のミズムシも治療し
ないことにし、月一回写真を撮って楽しんでいます。

先日は瀬谷の森でキノコのfairy ring（妖精の輪）
を見ました。これからは妖精たちの群舞を見ること
を楽しみに夜の森にも出かけてみようかと考えてい
ます。したがって心身共にカビ・キノコだらけの
日々ですが、耳順後半にしてやっと葦順の生活が送
れるようになった気がします。興味をお持ちの方は
一度見に来て下さい。なお、magic fungusはありま
せん。念のため。



この刻印は、雲南省・ナシ族のトンバ文字で「きのこ」を表しています。

昔の話

*

老祥樹

30年以上も前の話だ。当時はインターン制度があり、医学部を卒業したあと1年間のインターン生活を過ぎたのち医師国家試験があった。大学は、形式的な、だらだらと長く続く卒業試験が終ると、無責任に全員に卒業証書を渡した。

医師になりたければ、インターンの期間中に勉強し自己責任で国家試験に合格せよと大学は考えていた様だ。当時の試験の合格率は98%だった。100%に至らないのは、試験場には現れるがなぜか試験の途中で考えが変わったり、気分が悪くなったりして試験放棄した者がいるためだと云われていた。合格は間違いないと思いつつもインターン生活が残りに少なくなると急に国家試験が気にかかった。試験の現在との大きな違いは筆答試験のほかに口頭試問があった事だった。

インターン期間中は4名のグループで各科を廻っていた。そこで我々4人も国試の準備をする事にした。我々4人はとりあえず夫々手分けして過去に出題された問題を集めることにした。国試対策講習会などは大学でやってくれる訳がない。なにしろ全員を無責任に卒業させた位だから、その後の面倒など見るなんて針の尖程もないのは当然だった。受験に必要なインターン修了証も卒業証書と同じ様にいくらかでも発行してくれた。ただこのインターン修了証がないと国試は受験出来なかった。大学卒業証書は文部省管轄、インターン修了証は厚生省管轄の違いがあったが。

医師国家試験は厚生省が行う試験だった。

インターン修了証は1回ぼっきりだったが、卒業証書と医師国家試験合格証はのちのち生涯付きま続った。だが当時はそう深くは考えていなかった。さて過去に出題された問題は簡単に見付かった。なんの事はない医師国家試験問題集が毎年発行されていた。橙色の薄っぺらい本だった。終戦直後には解剖、病理、細菌……など基礎系の問題が内科、外科、産婦人科、皮膚科、泌尿器科……の臨床系問題に加え

て出題され、いずれも論文形式だった。

殆ど医学全体に涉っていた。それが7、8年前からどうした訳か急に易しくなり、基礎系からは公衆衛生だけ、臨床系も内科、外科、産科、小児科の基幹科目のほかは、選択科目が2科のみに変っていた。選択科目は指定され毎回ころころ変っていた。形式も○×形、括弧埋め（しかも答は列記されていて選ぶ）、相手捜しの線引き問題になっていた。恐らく論文形式だと出題問題は簡単に作成出来るが、いざ採点となると面倒なうえに公正を欠く事があったのだろう。さらに医学部卒業者はいろいろ屁理屈は捏ねても文章を書かせるとまるで最低で小学生にも劣る答案が多かったのかも知れない。誤字も多いので辟易したのかも知れない。それでも受験生の少ないうちはまあ我慢できたが、次第に数が増えたので、アメリカ流の○×形式、選択問題の形式に変えたようだ。最近の問題は特に易しく、平凡だった。形式もこの数年間まるっきり変っていない。それでも我々は一抔の不安があったので合宿する事にした。各人の家に2、3日ずつお世話になり、世話する事にした。この合宿は卒業試験の時期にも行った。部屋に十文字に寝床を敷き、中央に炬燵を置いて、炬燵の上に教科書、問題集、ノートを並べた。

4人がお互いに交代に問題集を見ながら問題を出し各人が答えると言う形式だった。当然全員が分からない問題もあった。その時はその各問題をチェックしておき、あとで教科書などで調べた。こうして勉強すると1つの問題に4人が解答するから4倍もの知識が得られたような錯覚に陥った。だがよく考えてみると、1つの問題に4人が答えるのだから1/4の知識しか得られなかったのかも知れない。その辺は余り詮索しない事にした。いずれにせよ、1人で教科書、問題集を黙々と読んでいるより、はるかに楽しく、効率が良かった事は確かだった。食事、洗濯の心配もなく気兼ねなく勉強が進んだ。午後になると気晴らしに散歩に行った。晩飯前にはビール、

酒も出た。

2、3日すると各人は一旦実家に帰り1泊して、また翌日次の家に集った。その結果、試験の直前には筆答試験なら90%以上確実、まかり間違えば100点も夢ではないと自信だけはついたのだから、合宿は大成功だった。ただ口頭試問の対策には苦慮した。何科の試験委員から質問されるか全く分からなかった。質問内容は兎も角、委員の専門分野だけでも知りたかった。が、当時は試験委員は公表されていなかったのも皆目見当がつかなかった。1年前の卒業試験の口頭試験の状況を思い出すより仕方があるまいと思った。試験官も血の通った人間だからそれ程冷酷ではないだろうと思った。ただ、皮膚科、耳鼻科、眼科、神経科の専門医が試験官だったら厄介な事になると思った。基幹科目の内科、外科、小児科、産科以外は余り自信がなかった。その他の科は殆ど勉強していなかったから。

国家試験の前日は試験場に近い宿に泊った。

今更なにもする事もなかったのもビールを飲んで早くから寝てしまった。試験当日は雲ひとつない快晴だった。試験場の某大学の校舎には既に多くの受験者が集っていた。数年前に味わった入学試験のような雰囲気は漂っていた。だが知った顔はなかった。勿論インターン仲間もない。厚生省は意識して同じ大学の卒業生を分散させて試験を受けさせたいらしい。カンニングを防止したためだ。久方ぶりの試験だったので若干緊張気味だった。配布された問題に目を通すと、簡単な○×形式だった。しかも5題のうち3題に解答すればよかった。この数年来続いていた試験問題の形式と寸分と違うところがない模範的な問題が並んでいた。5題の全てに正解する自信はあったが、注意書きに3題だけに答えよとあったので、もっとも自信のあった3題に止めておいた。1日目の午後、2日目の午前中の筆答試験のいずれも難なく熟した。2日目の午後は最後の難関、口頭試問だった。数十人が2階にある大きなダンボールのような部屋に詰め込まれた。窓が1つもなく蛍光灯の明るさだけがやけに輝いていた。試験について事務員からいろいろ注意があった。要するにトイレ以外はこの部屋から出てはいけなく、名前を呼ばれた者は案内人の指示に従えと言う事だった。そのあと各人に受験順番の札が配られた。札を見るとなんと最後の最後、どん尻の組だった。

呼ばれるのは3、4人ずつで、呼ばれた者は再びこの部屋に戻る事はなかった。情報が漏れるのを防止した一方通行の順路だった。

数時間が過ぎた。残りは3、4人になった。

今更興奮しても仕方があるまい。運を天に任せるよりないと思い最後の小便に行った。

名前を呼ばれ時計を見ると5時近かった。

案内人について行くと廊下の奥に部屋が数室あり①番から④番までの札がぶら下がっていた。廊下から見ると外は既に薄暗かった。④番の部屋だけには入りたくないと思っていたら、②番の部屋の前まで来ると、案内人が「ここです」と微笑んで中に入るよう促した。

深呼吸をしてドアをノックすると「どうぞ」と応答があった。静かにノブを廻して踏み込むと目の前に大きな机があり、机の向こう側には一見温厚そうな中年の試験官が3人坐っていた。当然ながらどの顔もこれまで見た事もない顔だったので少々不安になった。大きな机の上のシャーカステンにはX線写真が1枚ぶら下がっていた。先輩から顕微鏡とプロジェクターのある部屋だけには入ると注意されていた。だが部屋はこちらで選ぶ訳にいかないのもそう上手くはいかない。顕微鏡があると、血液標本とか病理組織標本があり、その部屋の試験官は臨床よりむしろ基礎に興味があるようだ。

だから時に難問を喰わせることがあるそうだ。またプロジェクターの置いてある部屋の試験官は大方我々が殆ど興味を示さない皮膚科の専門医の事が多く、カラースライドの皮膚疾患を投影し、自分だけしか知らないような皮膚病について、ねちねち質問するから困ったもんだと某先輩が話していた。その先輩はそれでも合格した。シャーカステンには胸部のX線写真が写し出されていた。一見温厚そうな肥った丸顔の試験官がX線写真を指しながら、「どうです。なにか異常所見がありますか」と話し掛けて来た。異常があるから試験に出したのだろうと思ったから、逆わずに「はい」と答えた。無駄口は災いの原だと思ったのでその他は一切言わない事にした。確かにX線写真の肺は濃淡がひどく、肺の一部が大きく不規則に盛り上っているようだった。だが肺実質の腫瘍ではないようだ。かと言って血管の陰影にしてはちとおかしい。すると縦隔洞腫瘍かも知れないとぼんやり考えていた。

試験官は「ではどういう疾患だと思いますか」と追求して来た。そこで一か八かで「Mediastenal tumorと思います」と答えた。

すると試験官はにっこりして「Mediastenal tumorにはどんな腫瘍が多いですか」と更に執拗に迫って来た。知っていたのはたったひとつ良性のDermoid cysteだったので「Dermoid cysteと思います」と大声で答えた。

すると丸顔の試験官は吃驚して黙って隣の試験官を見た。大声に驚き、また呆れたのかも知れない。丸顔の隣に坐っていた試験官は痩せた^{からだ}躯に禿げ上がった頭を持っていて、顔色は余り良くなかった。いかにも疲れたと言う表情で半ば義務的に「ところで君、ルンバールをした事がありますか」と問いかけて来た。一瞬ぎくっとした。「あります」と答えた。

確かに1回だけルンバールをした経験はあった。しかもその時は失敗していた。脳性麻痺の患者で、週一回定期的に髄液を採って^と検査していた。患者は意識も痛覚もなく、誰がしても100%成功する症例との事だった。

ところがその時に限って針を刺しても髄液が出ないの、2、3回針を押ししたり、引いたりしていたら、真赤な液が認められた。血液だったのだ。傍にいたインターン係の助手は呆れ返って「君、今日は止めにしましょう」と云うと足早に病室を出て行ってしまったのを思い出した。それ以外ルンバールをした覚えはない。

しかしたった1回とは云え、またルンバールを失敗したとは云え、ルンバールをした事には違いなかった。「圧はどの位でしたか」と更に尋ねられた。今度は正直には答えなくて、教科書に記載されている髄膜炎の所見に合わせた。髄膜炎のルンバールの所見は山中の山だったのでよく覚えていた。多少尾^お鰭^{ひれ}をつけて喋ってしまった。試験官は半分眠って聞いていた。痩せて禿げ上がったその試験官は第3の男の試験官を見た。第3の男はさも疲れたと云う表

情で一言も質問せず^{うなず}に軽く頷いただけだった。しばし間を置いて「もうよろしい」と言った。

それもそのはずだ。なん時間も余り出来の良くない連中を相手に口頭試問を繰り返していた試験官に疲れが生じない訳はない。最後まで元気のある試験官がいたらそれこそ^{けだもの}獣だ。

ほっとして「どうも」と丁寧に挨拶をして部屋を出た。X線写真の所見はいくらか心配だったが、昔から肥った丸顔の人間と禿げた人にはまず悪人がいないと言われているから、大丈夫だろうと確信した。外に出ると真っ暗だった。しかし春の香が外気一杯に満ちみちていた。そしてある先輩の話をまた思い出した。口頭試問でいろいろ質問されたあと、「ところで君、正常の赤血球数、白血球数はどの位と思いますか」と問われたら要注意、危険信号だから慎重によく考えて答えるようにと言われた事を。

現在ではインターン制度も廃止された。国家試験の時期、内容も大いに変わった。

いつごろからか分からないが勿論口頭試問も消失した。それに変わって電子計算機に頼る非情なペーパーテストのみになった。口頭試問は確かに胃には良くはないが、電子計算機(コンピューター)にのみによるペーパーテストのような情無情ではない。血の通^{かよ}った人間が出来ただけ助けてあげようと受験生に温かい気持で接してくれたように思う。これは大学の卒業試験にも云える事だ。現在の医学生は卒業、即ち医師国家試験と云う事情があるにせよ、余りにも国試を意識しすぎるきらいがある。これが本来の医学教育を阻害しているように思える。

大学によっては6年の医学教育を5年に短縮し、最後の1年は国試対策に向けたカリキュラムを作っている処もあると聞く。これでは良い医師が育つ訳がない。そのためどこか変った医師、狂った医師が誕生するのもかも。世の中全体が変だと言えばそれまでであるが、もう少し医学教育は正常軌道に乗るように修正されないものだろうか。

インド雑感

*

日下部芳志

よくインドへ行くと、その魅力で人生観が変わるか、二度と行きたくないと思うか、どちらかになると聞いていた。私は未だに1年前の事が忘れられないので、やはり前者の方かもしれない。

インドの印象は、なんと言ってもカレー、1日中カレー、どこへ行ってもカレー、味の基本はカレーであること。朝から晩までカレー味なのである。次に、街中、特に混雑している街。車で混雑している大きな街だろうと、人やリクシャーで混雑している小さな町であろうと、道は、牛糞と埃が舞い上がって、遠目にはスモッグ状に見える。また、手が荒れてしまうくらい、手拭きを使う事。インド旅行を無事に終えたければ、これは必需品と思われる。アル



村の肉屋と子供達

コール付きの手拭も、ミネラルウォーター同様常に必要となる。まず、その紙幣の汚さに驚かされる。どんな一流のホテルでも、たとえば100ドルをルピーに替えたとすると、札束がホチキスで留めてある。そのホチキスを無造作に取って渡してくれるのだが、もうそこで札に少々穴があくが、おかまいなしである。そして、その札は多くの場合実に汚い。これを触った後、うっかりその手で物を食べようものなら、それ相応の覚悟が必要である。またトイレは必ずホテルで済ませる方が無難である。なにしろトイレ普及率は25%程で、街中ではなかなか捜せない。実際、妙齢のご婦人が、公道の端でしゃがみこみ、母親らしき人が、それを布切れで隠している光景も見受けられた（もちろん、これらは皆生活習慣

の差や、文化の差から来る事で決してインドの人々を誹謗するものではない)。また、ある城の前の立派な歩道は、片側が完全にトイレと化していて、ひどく臭かった。

こんなインドだったが、今でも忘れ難い人々との出会いや、光景があったので、その事をお伝えしたい。

〈最高裁判所の判事ヴェルマー氏に招待された時の話〉

それは、帰国する最後の晩だった。ヴェルマー氏は、同行した友人の元患者で、前々から彼を待っていて、我々はその連れという事で招待された。氏の家へ着くと、すぐ2階の部屋へ案内され、早速美しい2人のお嬢様とヴェルマー夫妻及びその友人の歓待を受けた。綺麗なインド織りのレイと純銀の器を記念に頂いた。別室で我々用に特別に辛さをひかえたカレー味のご馳走を頂き、居間に通された。中央に大理石で出来た噴水があり、周りの水面には庭で摘んできた薔薇が一面をおおい、かぐわしい香りを漂わせていた。友人や親戚がシタールや太鼓を演奏し、ヴェルマーさんは、ガンジスの流れの様に、とうとうと歌を歌ってくれた（下の写真）。別れの時、門を出ると、一斉に花火が打ち上げられ、ヴェルマーさんの目も光っていた。



ヴェルマー氏（中央）宅にて。右から2人目が筆者



リクシャーの親方と

〈牛糞埃の舞う雑踏の中、リクシャーに揺られて ガンジスの夕日を見に行った翌朝の話〉

ホテルの廊下で誰かが苦しそうに吐いている声で目がさめて、改めて心を引き締め、ふらっと外へ出た。昨日のリクシャーの親方が「何処へ行くのか」と近付いて来た。なにしろ彼らは、100ルピー（250円）の為に、1日中でも客を待っている。「ちょっと、その辺を見て回るだけ」と言うと、いっしょに、ゆっくり歩いて付いて来た。

メインストリートと地図には書いてあるが、その実、舗装は剥げ落ち、土の部分が3m程路肩を作っていて、中心にかろうじて舗装が在る。ここを人々とリクシャー、車がひしめいて行く。しかも時々御牛様（野良犬ならぬ野良牛）が悠悠と行く手を阻むのであるが、人々は意にも介さず、神技のようなテクニックで走り続けるのだ。隣の車との間が10～20cmという事も度々あった。

少し歩いて行くと、脇に2～3m程の路地があり、親方の家は、そっちの方に在ると言う。夜なら躊躇したが、昼で、なにより牛糞埃から逃れたく、その道へ入って行く事にした。

中に入ると、そこには、村の日常があった。すぐニコニコと数人の子供達が集まって来たが、誰も何も要求しない（これは、観光地に集まって来る子供達が、一様に物を売りつけようとしたり、食べ物をおねだるのとは、異なっていた）。家の前の半畳程の洗い場で洗濯をする女性、髪を洗う人、料理をする人、とても落ち着いた日常でなぜかホッとした。また、可愛い2～3歳の男の子を抱えて、誇らしげに微笑む男性。その庭ではムユウジュ（無憂樹）の木が生え、牛がのどかに群れていた。しばらく行くと、お菓子屋さんがあり、餡がビンの中に入って売られていた。その頃になると、私の周りには7、8人の子供達がいたので、店の人に小銭を渡し、皆に餡を

配ってもらった。どこの国の子供達も同じと思うが、アメ1個で、こんなに嬉しそうな顔をしていただくと、こちらの方が、少し照れくさくなってしまうのと、私の方こそ、心に何か頂いた様な気になってしまった。しばらくして、その裏町の一区画は見終わり、元のメインストリートに出た。そこで、親方にお礼を言って、心付けを渡そうとすると、「先程もう子供達に頂いた」と言って受け取らなかった。親方だった。



リクシャーの親方夫人とその家

〈それは、11月初旬のインド。街境の交差点で、 信号待ちをしていた一瞬の出来事だった〉

夕暮れ時の大渋滞、辺りは埃や牛糞、排ガスが立ちこめ、砂嵐の中に居るようだった。と、車の窓を叩く音に驚いて見ると、ボロボロの服を着て、細い体で長い髪を首までベトリとたらしめた10歳程の少女が、ボロボロに巻いた丸太を右脇に抱えて、左手をつぼめて口先へ持っていき、翻して窓の方へさしのべた。「食べる物をくれ」のサインだ。丸太の様に無造作に抱えていたのは、赤ん坊だった。夕暮れに光るその子の目が、強烈に私の心に突き刺さった。ハッ！とした瞬間、車は走り出していた。振り返ると、砂塵の中に彼女は颯爽と消えて行った。それは、まさにヒンズー教の愛の神クリシュナの様に映った。

インド社会を見た時、最も良くそれを表わしている情景は、ガンジス河での沐浴シーンではないかと私は思う。貧富貴賤、老若男女、病人、否、死人まで、すべてを分け隔てなく包み込み、そこにはなんの差異も感じさせない。生と死は等しく皆平等だよ、小さな差異で悩み苦しむのは愚かだよと。一心不乱に精神統一して沐浴する大人、その横で笑いながら飛び跳ねている姉妹。その笑顔に私の心もすくわれた。